

書評

『世論をさがし求めて』 ——陶片追放から選挙予測まで』

●西平重喜 著

(ミネルヴァ書房, 2009年, 四六判, 280頁, 4,200円)



●海野 道郎

(東北大学教養教育院総長特命教授)

本書は、西平重喜先生が60年にわたる世論調査とのつき合いの中で書きとめたノートであり、文献からの覚書と個人的意見が混在している(「はじめに」より)。

序章を含めて9つの章からなる本書は、世論と世論調査という言葉に関するギリシャ時代以降の内外の文献逍遙(序章「世論という言葉」、第1章「世論はどう考えられてきたか」、世論調査の歴史・現状と問題点の指摘(第2章「世論調査はどのような経過をたどったのか」、第3章「世論調査はどのように行われているか」、第6章「世論調査の現状と問題点」、選挙予測(第4章「選挙予測は当たっているか」、第5章「選挙予測の公表禁止の問題」、国民投票の現状とその克服としての世論公聴制度の提案(第7章「国民投票はどう行われているか」、第8章「世論公聴制度の提案」、以上4つの内容で構成されており、そのいずれも、西平先生ならではの、と感じさせるものである。

本書の最大の主張はおそらく、最終章の「世論公聴制度の提案」であろう。これは、「民意反映という世論調査の考え方を生かす方法」であり、「国民投票と世論調査の中間的なもの」である。有権者のランダム・サンプルに対して、当該問題に対する賛否だけでなく、調査票形式で多角的に問うこともできる。サンプルに選ばれた者には調査に回答する義務があり、集計結果は議会審議の参考資料とする。この制度の特長は、従来の公聴制度とは違って、ランダム・サンプルに対する調査によって有権者の意見の縮図が入手でき、国民投票という大規模な手段をとらずともかなり正確に民意を把握できる、という点にある。

他方、評者自身にとって特に興味深く勉強になったのは、第6章を頂点とする調査方法論に関する諸章であった。第2章「世論調査はどのような経過をたどったのか」は、「世論調査の誕生と発

展」「世論の誕生と発展」「日本における世論調査の経過」の各節で構成され、特に最終節は、わが国の世論調査の歴史の一翼を担ってきた西平先生ならではの証言である。第3章「世論調査はどのように行われているか」は調査方法に関する批判的考察であり、ランダム・サンプリングと調査誤差について論じられている。良い世論調査を行うための基本的な心得が随所に記されており、初心者にはもちろん、熟練者にとっても、あらためて耳を傾けるべき重要な内容が記されている。

本書のハイライトは第6章「世論調査の現状と問題点」だ。この章では、世論調査は民主主義社会の基礎だと考える西平先生が、社会調査の現状に対する危機感を表明するとともに、それに対する対応を示唆・提案する。たとえば、近年の社会調査にとって大きな問題は回収率の低下に伴うデータの代表性低下だが、その原因の1つはくだらない世論調査が多すぎることだ。しかし、「その規制や制限は極力避けるべきだ」。代わりに個々の世論調査の評論が活発にされるべきである。そのように考える先生は「いわば世論調査評論家というような人が現れることを期待」している。しかし、われわれは、この期待に応えるだけの力を持っているだろうか。社会調査協会は、どう対応すべきだろうか。

西平重喜先生は、統計数理研究所を拠点として、わが国の世論調査をその草創期から中心的に担ってきた。われわれは、この先達の言葉に謙虚に耳を傾け、今後の社会調査を健やかに発展させるべく、ともに努力したいものである。

『社会福祉調査

——企画・実施の基礎知識とコツ』

● 齋藤嘉孝 著

(新曜社, 2010年, 四六判, 248頁, 2,310円)



● 小林良二

(東洋大学社会学部教授)

国会図書館の検索を用いてみると、これまで発行された「社会福祉調査」あるいは類似の書名をもつ書物はそれほど多くないようであるが、今世紀に入ってからは8冊程度発行されているようである。このことは、1990年代から、社会福祉を学ぶ学生だけでなく、社会福祉の現場に籍を置きながら、社会福祉の「研究」に携わろうとする人々が増えてきていることを示すものであろう。本書は、このような社会調査の手法を用いた研究を志す人々にとって格好の入門書であり、踏まえなければならない事項をわかりやすく、コンパクトに整理している点で、貴重な貢献であるといえるだろう。

もちろん、本書が「社会福祉調査」に関する書物であるといっても、「社会調査」に関する基礎的な知識を欠くことはできない。特に、研究の前提となる「概念」「変数」「理論」「仮説」などの用語の理解、調査の前提や実際の知識、統計学の基礎、データ分析の方法などは不可欠である。しかし、これまでの社会福祉調査に関する出版物においては、社会調査と社会統計学の手法を社会福祉分野に適用するとこのような研究成果が得られる、というようなスタイルのものが多く、社会福祉調査それ自体の特徴は必ずしも強く意識されていなかったのではないと思われる。それに対して本書では、そのような基礎的な研究手法の紹介とともに、社会福祉の調査において踏まえなければならない固有の事柄についても紹介しているのが特徴だといえるだろう。

たとえば、第1部「社会福祉調査の特徴」は、調査対象、調査主体、調査目的（ニーズ、事業評価、アセスメント）、社会貢献という項目で成り立っており、調査の主体と客体との関係を意識することが求められている。これは、社会福祉が援助あるいは支援の学問であることに由来することか

らであり、一般の社会調査においてはあまり強く意識されないのではないと思われる。

第2の特徴として、量的社会福祉調査とともに、質的社会福祉調査の方法に対して比較的多くの頁数が割かれており（第4部「質的社会福祉調査」）、基本的な質的調査と分析の手法が紹介されていることをあげておこう。

第3に、第5部「社会福祉調査をめぐる諸側面」については、注意深く読むことを推奨したい。ここでは、社会福祉調査を実施する際のいくつかの課題にふれているが、特に5-8「社会福祉調査の難しさ」においては、調査の企画、調査プロセス、分析や解釈のそれぞれの段階で直面する困難さが語られている。1カ所だけ引用しよう。「例えば被虐待の経験、家族の死亡、DV経験など、調査対象者にとって思い出すのもつらい経験はあるでしょう……それらを聞き出すことで、対象者を悲しませてしまわないか、悪い影響を与えないかなどと考えざるをえない難しさはあります」（210頁）。

このように社会福祉調査においては、調査者（研究者）が被調査者と一定の人格的関係に立たざるをえない面をもっており、その分、一般の社会調査における倫理よりも厳しい研究倫理を要請されることが紹介されている。このことは、社会福祉調査を行う際の心構えとして十分踏まえておかなければならないであろう。

本書の記述は平明できわめて読みやすい。また、本書は基本的に入門書であるが、ある程度、社会福祉調査に習熟した研究者も、この書物に目を通すことによって、自分の研究をふりかえることができるであろう。